

「日本における『公共』の精神と『徳』の育成に関する研究」 —倫理学を軸に公民科教育全体のカリキュラム開発に寄与するための—

所属校：東京都立南葛飾高等学校
氏名：渡 邊 洋
派遣先：上越教育大学大学院

キーワード：公共・倫理教育・人間・かかわり・日本の伝統思想の基底

I 研究の目的

標記主題の設定目的は、「東京都の教育目標」及び「東京都教育ビジョン」の中にある、「心の教育」の課題への解決方策がもととなっている。

近年、高校生を含むいわゆる青少年の持つ「公共心」や「倫理観」の問題及び課題が多々指摘されている。青少年をめぐるこのような社会背景の下で「公共の精神」、「規範意識」のかん養や「社会貢献」などが青少年の教育課題解決のための重要なキーワードとなり、特に1990年代後半より「心の教育」や「道徳」の重視も叫ばれるようになった。それは新しい教育基本法の前文にある「公共の精神」もその表れでもあったと考えられる。

しかし、私は、まず新しい教育基本法の理念である「公共の精神」とは何か、日本における「公共」の意味や価値について特に学校教育の中で正しくとらえられているかどうか等の問題意識に立って、今自分ができることとして、自分の専門領域(公民科倫理)に立ち返り、所属する都立高等学校の教科教育活動や研修成果等を軸にして日本における「公共(心)」や「徳性」を体系的に再検討し、課題に対する解決策として提示しうる研究ができないだろうか、と考えた。したがって本論稿は、自己の研究の視点を日本における倫理思想を視座に据えながら「個々人の『自己』理解が『他者』への理解、ひいては『公共』世界観への形成へと結びつくような人間論(山脇直司『公共哲学とは何か』2004)等を基礎として「公共(性)」をとらえようとしたものであり、日本から発信し、学校教育から社会・世界に広がり・つながりうる「公共」観を考察検討することを目的とした研究である。

II 研究の方法

論文構成案の流れで述べると、現教育環境下における主題に基づく「公私」の意味の再検討や高校生の「公共(心)」に関する現状等をまず踏まえつつ検討する。次に理論主軸である「倫理学」と主題とのかかわりになるが、「倫理学」はアリストテレス以来とも言われ、その形態も様々であるが、私が今回学として特に扱ったのは主に江戸儒学と和辻倫理学を軸にした日本思想からの視座である。そこから日本における公共や

倫理がいかにあるか・あるべきかということについて検討した。

私は、公共的であることの背後にはいつも倫理的なものがあると考えている。例えば公共政策をする場合、人間の「生」をいかに豊かにするかということが本来の目的であり、いいかえればそれは人間の徳性を持った営みであり、そこに倫理的な課題が常にあると考える。公民科目倫理は「在り方生き方」にかかわるから、自己自身やその周辺の生をより充実・発達させていこうというところにその主目的があるとも考えている。

また、私が考える人間観の根底には、個には常に「他者」があり、さらにその先に「動的な場がある」ととらえるのであるが、そこに、私たちがどのように実際「かかわる」のかということの前提が「公共」をどう定義するかの方法につながっている。さらには欧米のような「合理的な主体」ではない日本の個や主体の問題をもう一度再検討する意味についての考察が必要であると考え研究を行った。

III 研究の結果

本研究ではまず、主題の中心用語である「公」「公共」「公德」(の源)とは何か、を字義に戻って再検討するとともに、日本の「公共」における問題の所在について考察した。そこで検証されたのは「公共(性)」の概念というのは、実体としてあいまいでかつ複雑であるとともに、政治的、経済的、社会的などいろいろな見方から論ずることが可能であるということである。したがって、日本の「公共」の位置づけは従来のような「公私」の二元構造だけでは説明出来ない多義的なものであるとともに、理念的にも日本独特の思考構造(二重構造あるいは重層構造)を持っていることが明らかになった。

次に現在の青少年にみられる「公」と「私」、「公共心」及び「規範と道徳性」、「自尊」や「他者」などに対する課題と仮説について考えた。そこで検討すべき課題として明らかになったのは日本における「公共」の基盤の弱さと主体としての個や人間関係のあいまい

さや不安定さであり、これらの点について克服すべきモデルを以降に考察した。

日本における「公」や「公共」及び「公德」というものは、本来が輸入された概念だとしても、これらは歴史や文化の中で重層的に「かかわり」ながら「広がり」「つながり」って育まれてきたはずであると考え、その視座から日本における「公德」生成の基底やその思想的要因についての検討を行った。

そして、以上のような検討と考察から、日本における「公共」の課題方策のためのキーパーソンにしたのが、近世の儒学者伊藤仁齋と近現代の倫理学者である和辻哲郎の思想である。このことは、すでに私の研究視座からは儒教の「仁」という概念も家族的な倫理的行為というものから家族を超えたような公共倫理を育てさせるものであり、その意味で学び直すことの意義をとらえていた。近世日本にあって、江戸期の儒学者伊藤仁齋は、当時の朱子学的「公德」を批判しつつ、「古学」にかえり日常生活世界の中での人間としての規範と価値を探究した。「道は天下公共の物」(『語孟字義』)であり、その動的な場が「道」であるとした。さらに仁齋は、『中庸』の「天・性・道・教」を軸とした系統性の中に、人間の「徳」における「本然(本体)と修為」、「公共」及び「徳」を「教」によって高める必要を体系的に論じた(『童子問』上 十二、等)ことは今後あらためて注目されてよいと考える。

また、和辻哲郎は「人間共同態の理法の学」として『倫理学』(1937)を著し、近代日本において「日常」の立場から「公」とは何かを問い、仁齋と同じように「公」をできるだけ開いたものにしていくような動的「人間—社会」(「間柄・人間」)観を描き、夫婦から国家に至るまでの「公共」観を体系的に構想した。

戦時中から戦後に構想され、かつヘーゲル及びハイデッガーに多く影響を受けたともされる和辻の学説は現在でも検討と批判の対象となっていることも事実である。しかし、「出発点としての日常的事実」からの「公共」の根底に「人倫」、「信頼」、「誠実」を基礎にした在り方生き方(これも仁齋の思想と共通する)に関する原理論(特に「倫理」そのものへの問い)に関しては再評価すべきものであると私は結論づけた。

そして本研究のまとめとして、それまで検討及び考察したものを現在の学校教育活動について生かすことを研究課題とした。そこでは特に、これからの道徳倫理教育において、いかに「公共」を高めていくかというものの視点が今後重要であると考え検討した。実際に現在の高等学校でも教科書『現代社会』及び『倫理』

に本来の「公共」概念の記述はかなり少なく、今後は公民科の中に「在り方生き方」としての中に小・中学校からの接続的な「公共」教育の視点が特に必要であると考えた。

また、公民科の目標である「在り方生き方」の実現のためには「社会事象」に基づく指導と「価値」に基づく指導の両立が望まれる。その意味において「価値の指導」や「道徳性」の育成についての研究では、アメリカのコールバーグ理論は今なお大きな影響力を持っており、今後も重視・注目されるが、私は日本の「公共」観から「徳」を後天的に高めていくという理論を日本人からも模索したいと考え、金井肇の「構造化方式」(『道徳授業の基本構造理論』1996)による探求を試みた。金井理論は人間の「自然性」を重んじ、道徳性を段階的に高めていこうとするものであり、前章までの仁齋や和辻の思想に沿いながら日本の視座からとらえ直していくことによりさらにその理論・実践的評価がより高まるのではないかと考えた。

最後に、これからの学校教育における「公共」教育の展望として戦後「社会科」の目標である「公民的資質」を確認しながら「公民教育」の視点の他に「公共教育」の視点の重要性を論じた。さらに「生涯学習社会の実現」を踏まえ、「新たな公共」観への「かかわり」を東京都の教科科目『奉仕』等に求め、学校教育から社会・世界に「広がり」「つながり」うる地球市民的「公共」観について考察することで本研究のまとめとした。

日本における「公共」及び「徳」の実現のためには今なお課題が残されるころではあるが、以上が標記の課題について私がまとめた成果である。

IV 考察

本研究は主題に関する概念の再検討及びあるべき原理論の提案を主要課題として設定した。したがって今後の課題としては、上記に述べた「公共」課題を私自身が公民科の実際の授業でどのように整理し、単元化し、指導・評価・改善していくかが検討目標である。したがってこれからも本主題目的に沿って公民科全体のカリキュラム開発及び「心の教育」の課題への解決方策還元一助のため微力ながらも研究を進めていきたいと考える。